

はじめに

相場に大きなトレンドを作るパワーはいくつかあります。ひとつは「中央銀行の意向」です。アメリカ、EU、日本の3国の中央銀行総裁の発言は、ユーロ/ドル、ドル/円という世界で最も取引される通貨に多大な影響を与えます。

もうひとつは「資金のフローを作る人々」です。ドル/円なら「実需勢」、ユーロ/ドルなら「投資家」にあたります。彼らの取引によって、相場は数千 pips、何十円と動くことになります。

このように相場は「各国の思惑」や「相場参加者の意向」によって大きく動き、またその動きの背景には「ストーリー」があります。「誰」が「何のために」取引しているのか、そのストーリーを頭に入れて相場に参加しないと、1日に何十兆、何百兆と動く巨大なマーケットで長く生き残ることはできないでしょう。

8月に入り、世界的に夏休みシーズンへ突入したため、9月のレーバーデーまで静かな動きになる可能性もあります。今のうちに、マーケットに流れる新しいストーリーを把握して、今年の後半戦に備えることをお勧めします。

また第3章では「値動き分析」についての動画 URL も掲載します。相場の上昇・下落はテクニカル分析やファンダメンタルズ分析だけでは分からないことがあります。「〇〇のニュースを受けて」などのエクスキューズ（言い訳）で片づけてはいけないケースもあります。相場がどのように上下動しているのか、その予測方法をお教えいたします。

<目次>

1章 ドル、ユーロ、円の中央銀行のスタンス

- (アメリカ) FRB のドル高けん制の姿勢
- (ヨーロッパ) ECB のユーロ安への誘導とドル高けん制に対する対応
- (日本) 黒田日銀総裁はどうする？
- 1章 まとめ

2章 ユーロ/ドル、ドル/円に影響を与える大きなパワー

- ユーロ/ドル相場を動かす人々
- ユーロ/ドル相場に影響を与える商品市場の動向
- 実需勢がドル/円の大きなトレンドを作る
- 2章 まとめ

3章 テクニカル分析、ファンダメンタル分析とは違う「値動き分析」について

1 章. ドル、ユーロ、円の中央銀行のスタンス

(アメリカ) FRB のドル高けん制の姿勢

米国とユーロ圏それぞれの 2015 年の第 1 四半期 GDP・確報値によりますと、前期比で米国は-0.2%、ユーロ圏は+1%でした。あれ？ 悲観的な見方をされていたユーロ圏の経済が、米国より GDP の数値が高いってどういうこと？ と思いました。ユーロ圏の GDP のほうが米国のそれより大幅に良くなっているわけです。なぜ、米国の GDP がそれほど振るわなかったのか、その原因を調べてみますと、米国の貿易赤字が大きく増えていたためでした。

今年に入りユーロ安ドル高が大幅に進んだために、「米国⇒ユーロ圏」の輸出はドル高の影響で低迷する一方、「ユーロ圏⇒米国」の輸出はユーロ安の影響で、大幅に伸びたということです。

そこで、お気づきになるかもしれませんが、イエレン米 FRB 議長がドル高への懸念を何度も発してきたのは、こうした経済事情があったからだと言えます。

(ヨーロッパ) FRB のドル高けん制に対して

それに対して、ECB がダンマリを決めています。ユーロ/ドルについては、ドラギ総裁が率いる ECB の意図にしたがって、ユーロ高にもなり、またユーロ安にもなってきました。

最近では、ユーロ圏の景況感が米国よりもはるかに良くなっています。ユーロ圏の経済がもっと体力をつけるため、さらにユーロ安を持続させたいというのが彼らの本音だと思います。だからこそ、米国や日本が「ドル高もそろそろ……」と言っているにもかかわらず、ECB はダンマリを構えているものと思われまます。

(日本) 黒田日銀総裁はどうする？

6 月 10 日に黒田日銀総裁は、「ここからさらに円安はありそうにない」と発言しています。言い換えれば、「ここからさらにドル高になることは起こりにくい」ともとれます。これは 2011 年以来の約 45 円もの大幅なドル/円の上昇が一服しそうなことを示唆しているものと思います。

さらに、昨年の夏から今年の冬にかけて 105 ドル近辺から 45 ドルまで下落した原油価格が、約 4 年に渡って円安ドル高を牽引してきた貿易赤字を縮小させていることも、このような発言に繋がっているものと思います。

「黒田発言」とは前後しますが、フィッシャーFRB 副議長は4月17日に最近のドル高について「そう遠くない将来に」終わるとの見方を示していました。つまり米国も日本もドル高のピークは近いという見方を表明しているのです。

1 章まとめ

世界取引量 NO.1 の通貨「ユーロ/ドル」と NO.2 の「ドル/円」は上記3名の発言に大きく影響を受けます。

ユーロの大幅安は ECB のドラギ総裁の発言によって、大きく誘導されました。ここにきて、ユーロ安（ユーロ/ドルの下落）になるための大きな受け皿となったドル、つまりアメリカも貿易赤字に苦しんでいます。そこでアメリカはユーロ安によってもたらされた「ドル高」は自国の経済の向かい風になる、と FRB 副議長が懸念をあらわにすることで「ドル高」を抑制しようと市場にはたらきかけました。

アメリカのドル高懸念に対して、ECB はまだ明確に動きを見せていません。まだ経済が不安定なユーロ圏なのに、あえてユーロ高（ドル安）にしたいとは ECB は考えていないためだと思います。そして日本の黒田日銀総裁も円安（ドル高）への誘導を最近では大きくしようとしていません。

このように各国の中央銀行総裁のスタンスを見ておくことは、「相場のストーリー」を考えるうえで大変重要となるため、今後も注意しておくといいでしょう。

そして、相場は中央銀行総裁の発言だけで、大きく動くわけではありません。ユーロ/ドルとドル/円には、注意して見ておかなければいけない「ビッグプレーヤー」や「影響を与える関連市場」があるのです。それは第2章でご説明します。

2. ドル/円、ユーロ/ドルを動かす大きなパワー

ユーロ/ドル相場を動かす人々

一番ユーロ相場の転換に影響を及ぼすのは、ユーロのフロー（資金の流れ）をつかさどる投資家筋の動きだと思われます。投資家筋とは、政府系ファンドやペンションファンド（年金運用機関）、また少し系統は違いますが外貨準備を動かす中央銀行などを言います。

投資家が動かす理由には、大きくはふたつあり、ひとつは高利回り運用を目指すような前向きな理由があります。もうひとつは、資金を預けている国・地域で地政学的リスクなどが発生すると急いで資金を逃避させようとする後ろ向きの理由があります。

彼らは、ユーロ圏にリスクがあるとして、昨年 5 月以降、大挙して資金をユーロからドルへ移動させました。これが、ユーロ安の原因だったと言えます。

しかしここにきてユーロ/ドルと相関性の高い金価格と原油価格にも変化が訪れています。

ユーロ相場に影響を与える商品市場の動向

ひとつの記事が気になっています。その記事の概略は以下の通りです。

“

7 月 17 日（金）、COMEX（ニューヨーク商品取引所）で、金価格が、一時 1 トロイオンス 1,129.6 ドルと約 5 年 3 ケ月ぶりの安値をつけた後、前日比 12.0 ドル安の 1,131.9 ドルで引けました。さらに、原油も一時 1 バレル 50.14 ドルと約 3 ケ月ぶりの安値をつけ、結局前日比 0.02 ドル安の 50.89 ドルで引けました。

”

金価格の下落の原因は、イエレン FRB 議長が議会証言で年内利上げを示唆したこともあって 利上げを意識した売りだったと説明されています。原油に関しては、ユーロなどに対するドル高が原因とされています。

しかし、金にしても、原油にしても、それ以前の問題として、地合いがかなり悪かったことは否めません。金価格は、2012 年から 2013 年にかけて、1800 ドル近辺から 1200 ドル近辺まで急落しています。原油価格は、2014 年の夏から今年の春に掛けて、105 ドル近辺から 45 ドル割れまで急落しています。

2015 年後半の相場で注目される新たなストーリー

それほど、間を置くこともなく二大商品相場が急落していることには、実は以前から非常に気になっていただけに、今回の同時下落は、今後大きな下落の前兆なのではないかと思っています。

しかも、金価格も原油価格も、ユーロ/ドルと相関性が高いとされており、これら二大商品相場が崩れることは、ユーロ/ドルの下落の可能性をも意味するわけで、注目されます。

ギリシャ問題も峠を越え、目先ユーロ/ドルもレンジ相場になる可能性があると思っていましたが、このまま、金も原油も下がることになると、ユーロ/ドルも二番底をつけに行くことになり、当初考えていた 1.08 レベルより低いレベルまで下落する可能性があります。

特に、原油価格が、今二番底をつけにいており、前回安値の 3 月 9 日の安値（日足の引け値ベース）43.96 ドルをテストする可能性があります。また、金価格も、約 5 年 3 ヶ月ぶりの安値をつけてきていますので、続落する可能性は高いと思います。尚、金と原油という二大商品相場が、2012 年以降、相次いで下落している原因はまだ良くわかっていません。

しかし、言えることは、金や原油から資金が流出する一方、ドルはドルの総合的な強弱を示す U.S.Dollar Index を見る限りでは、高値圏を維持しており、資金の受け皿になっているものと思われます。

U.S.DollarIndex の週足（上がドル高、下がドル安）

<http://futures.tradingcharts.com/chart/US/W>

（※ロウソク足にするには、画面左の Chart Format の Candlestick にチェックしてください）

従って今後、金や原油売りが続くようであれば、特に ユーロ/ドルでのドル買いは続くものと考えます。

実需勢がドル/円の大きなトレンドを作る

財務省によって発表された 1 月～6 月の貿易赤字は、昨年同期比の 77%減となっております。実需による今までのドル買い需要が大幅な減少を見せています。これの相場への影響は、原油価格が下落に転じた昨年 7 月から 1 年程のタイムラグ持って、そろそろ影響が出てくるものと考えます。

ドル/円が貿易赤字下、本格的に上昇トレンドに入ったのは 2012 年 2 月で、その 2 月の寄り付きとなる 2 月 1 日の東京寄り付きは 76 円 27 銭でした。そして、6/23 のニューヨーククローズは 123 円 94 銭となり、その差は 47 円 67 銭になります。

つまり、3 年半弱の期間で、47 円以上ものドル高円安になったわけです。これだけ、相場が一方向に向かうためには、リアルなフロー（実際に存在する資金の流れ）がなくては、こんなすさまじい上げ方はしません。

では、ドル/円にとってそのリアルなフローとはなんだったかと言えば、それは、貿易赤字でした。2011 年に発生した東日本大震災により原発事故が起き、そのため国内すべての原発が停止しました。その代替エネルギーとして、液化天然ガスの大量輸入が始まり、貿易収支は赤字に転落しました。

また、産業全般にも輸入依存度が高くなっていったためにさらに赤字は拡大していきました。貿易赤字が拡大するということは、輸入（ドル買い）の方が輸出（ドル売り）よりも多くなる、つまり、恒常的にドル買いが発生することになり、これが、爆発的な上昇相場形成することになりました。

たぶん現在もここ半年のレンジの上限であった 122.04 を先月上抜き、今度は 130.00 と見ているマーケット参加者も多いのではないかと思います。ところが、この貿易赤字というドル買いにブレーキを掛ける問題が実は、すでに昨年夏から始まっています。

原油価格の急落で、昨年夏に 1 バレル 105 ドル近辺だったのが、今年の冬場には一時 45 ドルを割り込むところまで下げています。原油価格の下落は、つまりは原油の輸入代金を圧縮することになります。

しかも価格の下落幅はすさまじく、その分、輸入額も大幅に減りました。たとえば、貿易収支を単月で比べると昨年 5 月が 9172 億円の赤字に対して今年 5 月は 2160 億円の赤字とかなり減っています。今年の貿易赤字を簡単に試算してみると、昨年の 12 兆 7813 億円の約 6 分の 1 にはなりそうです。

このことから、今まで円安方向に向かっていた大きなフローにブレーキがかかったことになります。そして、そのことが、これからのドル/円相場にどういった影響を及ぼすかですが、多分、これまで約3年半続いた、しかも47円以上にも及んだ上昇トレンド相場が終わりをつげたものと見ています。

市場では依然としてドルブル（ドルに強気）な見方は強いようですが、このまま上げきれないと、反落する可能性が高まります。貿易黒字下の「ジリジリ、ストン」の動きになる可能性も出てきているのです。

今年の2月にメルマガご購読者向けにセミナー動画を撮りました。貿易赤字下の「グイグイチョコ」という動きと「ジリジリストン」の動きを説明していますので、ご参考までにご覧いただければと思います。

しかしこの動画は今年2月に撮影したもので、当時は貿易赤字下の予想をしておりましたが、現在の「ドル/円反落の可能性」の予想とは異なりますので、あくまで貿易赤字下と貿易黒字下の違いの資料までにお考えいただけると幸いです。

<https://www.youtube.com/watch?v=63Zk5QXpAgo>

※一般には公開されていないURLとなり、メルマガご購読者様向けの動画となりますので、URLをブログやSNSで公開することはご遠慮ください。

2章まとめ

ユーロ/ドルの相場に大きく影響を与える投資家、ドル/円の相場に影響を与える実需勢など、中央銀行総裁以外にも相場を動かすプレイヤーはいます。彼らのことを把握しておかないと、なぜ上昇しているのか、なぜ下落しているのか、ということが分からなくなると思います。

また、ユーロ/ドルでいえば、原油や金などの商品市場とも関連性があるので、注意しましょう。ユーロ/ドルは第1章でお話したアメリカからのドル高牽制発言により、過剰なユーロ安が収まり、一時的にユーロ/ドルは上昇するかと思いきや、原油や金の下落により、つられて下落しそうな可能性が今後あります。今後の動向は逐一メルマガでご報告します。

このように「相場の参加者の動き」や「相場に影響の高い市場」を見ながら、第1章でお話した「中央銀行の意向」と合わせて相場のストーリーを考えると、納得して相場に参加することができるでしょう。

3 章 値動き分析について

私はテクニカル分析とファンダメンタルズ分析以外に「値動き分析」を活用しています。値動き分析は相場のポジションの偏りから、相場がどのように動くのか予想する、というものです。

相場の上昇・下落を「〇〇のニュースを受けて」などのエクスキューズ（言い訳）で片づけてはいけません。実際にポジションがどのように動いているのか、ご自身で分かるようになれば、取引レベルは格段に UP すると思います。下記動画ではその予測方法をお教えいたします。

<https://www.youtube.com/watch?v=1qJgVftzrY0>

※一般には公開されていない URL となり、メルマガご購読者様向けの動画となりますので、URL をブログや SNS で公開することをご遠慮ください。